＜報　告＞

日本統治時代の台湾生活誌（V）

柴　　公　也

⑰　女学生の頃

蘇楊　珠（＊蘇は夫の姓）（1912 年生）台北第三高等女学校卒

私の父は読書人の家系です。老松公学校を出てから、当時の台湾の最高学府である国語学校の公学師範部（＊四年制）を修了しております。卒業後は、淡水公学校に勤務することになりました。月給は、14 円だったそうです。

私の夫の父は、「蘇宗徳」と言いましたが、台北では名士でしたので、北白川の宮様が台北に入城した際、有り難くも拝謁を賜り、「爾民（＊汝は民なり）」という名前を下賜されたとのことです。

母は資産家の娘でしたが、国語学校付属学校の技芸科（＊第三高等女学校の前身）を出て検定試験を受け、淡水公学校に勤務することになったそうです。ここで、父と知り合い、結婚することになったとのことです。月給は、11 円だったそうです。

父は結婚すると直ぐ、淡水河の向こう岸の八里が浜公学校の校長に栄転して、母と一緒に勤務することになりました。八里が浜公学校は、一年・二年・三年が一クラス、四年・五年・六年が一クラスの、合わせて二クラスだけの複式の小さな学校でした。低学年は母が担当し、高学年は父が担当していたそうです。

両親とも泉州系の閩南人で、開明的な人たちでした。夫婦仲は良くて、私は長女でしたが、妹や弟が次々と生まれて、結局 12 人きょうだい（＊二人は夭折）になりました。子供が多かったので、学校の先生ではとても子供たちを養えないということになって学校を辞め、士林の台湾製紙会社に月給 35 円で入社したそうです。

私は、数えの九歳で双連の蓬莱女子公学校に入りましたが、一年の二学期に父が士林の台湾製紙会社に移ったので、私も士林の公学校に転校しました。士林公学校は、一学年が男子二クラス、女子一クラスでした。当時は、義務教育ではなかったので、二歳ぐらい年長の同級生がおりました。一年から四年までは台湾人の先生でしたが、五年と六年は進学の関係で、斉藤という内地人の男の先生が担任になりました。私は、一年から首席で通しましたので、先生に叱られたことはなく、大変可愛がってもらいました。また、女子のクラスでしたから、喧嘩したり苛めたりすることなく、皆仲良

く過ごしておりました。

一年から日本語がありましたが、直ぐ覚えて二年頃には不自由なく話せるようになりました。それは、私が公学校に入るまでは、家では台湾語を話していたのですが、公学校に入ると、両親は家でも日本語を話すようになったからです。低学年の頃、休み時間には、級友たちと台湾語と日本語のチャンポンで話しておりました。高学年になると、日本語だけで話すようになりましたが、台湾語を使っても別に叱られることはありませんでした。また、六年まで週二時間漢文の授業がありましたが、台湾語の発音で上から下に読み下していました。

公学校時代には制服はなく、皆台湾服を着ておりました。靴もなく裸足で、教科書や筆記用具を風呂敷に包んで通っていました。弁当は、三年までは半ドンだったので、持って行きませんでしたが、四年からは、在来米 (＊ジャポニカ米ではなくインディカ米の一種) に卵や小魚、野菜などをおかずにして持って行きました。学校が終わると、ままごと、お手玉、おはじき、石蹴り、綾取りなどをして遊んでおりました。

朝礼の時は、私は級長ですから、級友たちの前に立って整列させる役割を任されていました。また、三年の頃、担任の先生の体調が悪い時には、前日先生の家に行って授業で習うところを教わり、先生の代わりに級友たちに教えておりました。言わば、代用教員でしたが、何とも大らかな時代だったのです。

士林公学校を卒業して、台湾人女子の最高学府である台北第三高等女学校に入学しました。一学年三クラスで、一クラス 42 人でした。同級生には、台湾人だけではなく、内地人も 18 人入学していましたが、たいてい内地人の名門校である第一高女や第二高女に入るには、少し成績の足りない人たちでした。ですから、台湾人の生徒に頭が上がらず、皆おとなしくしていました。学校では喧嘩したり苛めたりなどは一切せず、仲良く過ごしておりました。ただ、校内では台湾人同士でも日本語だけで話していました。

三高女には、私の妹たち四人も全員入学しております。それだけではなく、母は三高女の前身の国語学校の付属学校を出たことを大変誇りに思っていましたから、弟たち五人にも全員三高女出身の女性を嫁に迎えさせたのです。

三高女に入学した時は、上着は決まった制服がなく、黒い袴をはいて通っておりました。二学期になると制服が決まり、夏は白いブラウスに薄茶色の三本の線が横に入ったスカート、冬は黒いブレザーに黒いスカートをはくようになりました。足は、公学校とは違って裸足ではなく、ズックの靴を履いて通っておりました。ただ、カバンはなく、風呂敷包みを小脇に抱えていました。髪は、後ろで一つに束ねてくるくるまとめ、簪で留めておりました。

先生方は、皆高等師範や大学を出た立派な方たちでした。男の先生が女の先生よりも多かったのですが、台裁の先生を除いて全員内地人でした。先生方は優しい先生が

多かったのですが、作法と刺繍を教えている独身の女の先生だけは厳しくて、作品が気に入らないと、その場で投げ捨ててしまうというような怖い先生でした。生徒たちは、間違うと「先生、悪うございました。どうかお許しください」と言って謝っておりました。

作法の時には、一時間も座らせられましたから、授業が終わると、全員脚が痺れて立ち上がれませんでした。お花（＊池の坊）は習いましたが、お茶は習いませんでした。和食の食べ方やお茶の飲み方も教えられました。また、障子や襖の開け閉めや、立ち居振る舞いも教え込まれました。裁縫は、和裁、洋裁、台縫、それとフランス刺繍がありました。他にも染め物を習いましたが、料理の時間はありませんでした。

私は刺繍が得意で、全校で一番でした。私が丹精を込めて仕上げた刺繍の作品が非常に出来が良かったので、宮内省の職員が来て、皇室に献上されることになりました。指導の先生は面目を施したので、普段の厳しさとは打って変わり、相好を崩して大喜びでした。御褒美に御菓子一包みが下賜されたのですが、当時の台湾の生活水準ではとても口にすることの出来ないものでした。このことがあってから、私は全校でも名を知られるようになりました。

また、一年の時の作文で、「四季の花」という題が出されたことがありました。私の作文があまりにも出来映えが良かったので、先生に「誰か内地人に代作してもらったのだろう」と疑われたことがありました。私は大変悔しかったのですが、ジッと堪えて「誓って自分で書きました」と抗議しました。それが校長の目に留まって、全校生徒の前で表彰されたこともあります。今考えても、女学校時代は人生で一番楽しい時代でした。

第三高女を卒業してからは、結婚するまで別に仕事もせず、家事を手伝っておりました。結婚は、二十歳の時に親同士が決めました。昔のことですから、結婚が決まるまで写真も見ていませんでした。初めて会ったのは婚約の時でしたが、親同士が一緒だったので、話はせずに挨拶しただけでした。初めて言葉を交わしたのは結婚してからです。何でも夫の母が私を大変気に入って、縁談を持ち込んだのだそうですが、当時は本人の意思は問題にならず、親同士の合意で決まっていたのです。

夫の父は、基隆の近くの炭鉱を経営する百万長者でした。夫は小学校四年の時、13歳で東京に行き、大学卒業まで14年間内地で暮らしていました。東京では、台湾の学生を専門にしている下宿に住んでおりました。中学は東京でしたが、首席で通したそうです。その後、岡山の第六高等学校を経て、東京帝国大学の経済学部に入学しましたが、一年在学中に私と結婚することになったわけです。

結婚式は、台湾の夫の自宅の豪邸でウェディングドレスに身を包んで挙式して披露宴を開きました。結婚して一ヶ月ほどは台湾におりましたが、その後は東京に行き、中野に新居を構えました。内地に行ったのは初めてでしたが、東京には三高女の友人

たちがおりましたから、別に困ることはありませんでした。東京では、普段着物を着て、夫とは日本語で話をしていました。夫は毎日大学に行っていましたから寂しかったのですが、二年目に長男が誕生しました。その後、三ヶ月目に夫が大学を卒業したので、1933年に台湾に戻って来ました。

台湾での私たちの家は、台北から基隆に行く途中の汐止にありました。夫は祖父から基隆の炭鉱を譲り受け、経営者として過ごしていましたが、炭鉱の経営は終戦前に止めてしまっていました。皇民化の時代になって、「安武珠江 (やすたけ　たまえ)」と改姓名しましたが、自分のことは支那人とは思わずに日本人と思っていましたから、別に抵抗感はありませんでした。

日本の敗戦の報に接した時は、大変悲しくて、台湾はどうなるのかと不安で一杯でした。国民党からは、「台湾人は中華民国の国民で戦勝国民だ」と言われたのですが、嬉しいという気持ちは起きませんでした。その後、終戦とともに大陸から来た国民党に土地を取り上げられ、生活が段々と苦しくなってきました。日本時代には、13人もいた使用人も櫛の歯が欠けるようにいなくなってしまいました。その後の二・二八事件や白色テロの時代を経験してみますと、改めて自由だった日本時代が懐かしく思われたのでした。

⑱　砂糖黍農場の日々

馬本貞雄（1916年生）熊本農業卒

私は、熊本市四方寄の農家の次男に生まれました。熊本の農業学校を出て、家で農作業を手伝っていましたが、昭和11年5月に学校の推薦で、台南の近くの塩水港製糖会社に就職しました。外地手当てが付いて初任給は30円でしたから、二十歳前後の若者にしては、結構良い給料でした。ただし、勤務地は、東海岸の花蓮港から20キロほど南の寿庄にある花蓮港製糖所の砂糖黍農場でした。農場は、千五百町歩ほどもある広大なものでした。

農場には、内地人の幹部社員のほかに、台湾人の労働者がいて、その労働者たちを、中村、村山、増田という日本名の三人のアミ族の社員たちが監督していました。私は、社宅で自炊しながら、毎日砂糖黍栽培の指導と品質検査に明け暮れておりました。時々、在郷軍人として軍事訓練にも参加していました。台湾の東海岸にも、大陸の戦争の足音が響き始めようとしていた頃のことでした。

昭和13年の5月に、寿農場の事務所で、庄役場の係員から召集令状を受け取り、同僚五人と一緒に台北の歩兵第一連隊に入営しました。月給は10円ぐらいだったと思います。当時、台湾には志願兵制度がなかったので、台湾人の兵隊はおりませんでした。見送りは盛大で、寿駅頭の日の丸の旗の波、万歳の歓呼の声が今でも耳の奥に

響いてきます。ただ、親兄弟の姿がなく、これで娑婆ともお別れかと思うと、涙が止め処なく流れてきました。

連隊での訓練は厳しくて、古兵には大分気合を入れられました。食事と風呂に入ることぐらいしか楽しみはありませんでしたが、入浴後、戦友と身の上話に花を咲かせたものでした。たまの日曜日には、戦友と外出したりして楽しい思い出もありました。三ヶ月ほど訓練を受けて中支派遣軍に編入され、9月5日に基隆から輸送船に乗って上海経由で武漢に向かいました。前年12月の南京攻略では、便衣兵（＊軍服ではなく平服を着た兵隊であるが、国際法では禁止されている）を大分殺害したとの噂でした。

揚子江を遡って9月12日に九江に着き、200キロほど離れた武漢三鎮を目指して、秋雨の中の行軍を開始しました。行軍の途中の村は、皆逃げていてもぬけの殻でした。放し飼いの豚や鶏、家鴨だけが村の中をうろついておりました。米などの食料は兵站部隊が運んで来ていましたが、おかずにするのが足りなかったので、それらを徴発と称して捕まえ、食料にしておりました。道中、露営での食事は泥水で飯盒炊爨したものでした。

夜間の行軍の際には、真っ暗で道が判らないので、道を照らすために両側の空き家に火を放って灯りにしておりました。部隊は、山を越え谷を越えて強行軍を続けました。敵と遭遇した方が休憩できるから、早く出てきてくれないかなと戦友と話しながら行軍しておりました。途中、むごたらしく損壊された日本兵の遺体が打ち捨てられていました。支那兵は日本兵を捕まえると虐殺して、見せしめのために遺体を損壊するのです。

ある時、捕虜が引き立てられて来て、上官から刺殺を命じられたことがありました。しかし、捕虜を目の前にして、どうしても刺殺することが出来ませんでした。結局、他の戦友が代わって刺殺しましたが、何とも言えず後味の悪いものでした。また、捕虜を斬首する場面に出遭ったこともありますが、とても正視出来ず、思わず顔を背けてしまいました。

秋雨が降り続く泥道の強行軍では、洗濯はおろか体も洗えません。汗と泥水で軍服はベトベトになり、股擦れで両股から血が流れてきましたが、遅れたら命がないので必死に付いて行きました。行軍の途中、私の小隊50人のうち、20人ぐらいが水に当たって病死しました。何度か敵と激しい銃撃戦を繰り広げて、15人ぐらいが戦死しました。

夜間には敵の射撃が一段と激しくなり、チェコの機関銃弾がヒューンと頭をかすめていきました。その時の私の本心は、敵の弾が手か脚に当たってくれれば、傷病兵として内地へ送還されるのではないかというものでした。それで塹壕から手を挙げて見ましたが、弾はなかなか当たらず、結局、怪我もせずに10月26日に武昌に到着し

ました。途中、敵の敗残兵が方々にいましたが、既に戦闘意欲をなくしていたので戦いにはならず、友達になりました。ただ、言葉が通じず、話し掛けてもニコニコしているだけでした。

行軍の途中、「文」という16歳ぐらいの支那兵の少年が私たちの捕虜になりました。何でも上海の中学に通っていた時、兵隊に引っ張られたとのことでした。分隊の当番兵代わりにして荷物を担がせたり、駐留中は煮炊きや水汲みなどに使役したりしていました。日本語は片言でしたが、互いに気心が通じ合い、弟のように可愛がっておりました。二ヶ月ほど経って部隊が転進することになり、武昌で涙を流して別れました。

また、日本軍に協力してくれた馬賊がおりました。作戦中、私たち初年兵が水汲みに行くと、支那兵が堂々と水を汲んでいるのです。古兵が、「何だ、貴様は」と叱りつけましたが、その後、頭目が中隊長に面会を申し込んできたのです。中隊長が丁重に応対していましたが、頭目には数百名の部下がいて、我が軍の作戦に側面から協力しているとのことでした。

12月8日、悪戦苦闘の三ヶ月間を過ごした武昌を後にして輸送船で上海に向かいました。一時上海に上陸し、日本租界やガーデンブリッジを見学しました。再び、輸送船は上海から広州を目指して大海原を進んで行きました。何日か経って、広州の黄埔港に上陸しましたが、そのまま行軍して20キロほど離れた佛山市に到着し、南支那派遣軍に編入されたのです。

翌年の2月、佛山を出発して、海南島に向かいました。2月10日に海南島の西北部に上陸し、夜の12時頃、海口市の南四キロほどに位置している政治の中心地瓊山市（＊現在は省都の海口市に編入されている）に到達しました。その間、敵の抵抗はなく、無血占領に成功して紀元節と合わせて二重の喜びに浸りました。

昭和14年8月、大隊は海南島から広州に上陸し、新会市に駐留することになりました。我が小隊は、宿営地から5キロほど離れた大梅山の警備に当たりました。ある日、孫文の生誕の地の中山県に敵の討伐に出掛けたことがありました。討伐を終えて、帰途の行軍の一時休憩の時、数人の支那服姿の老婦人に出会いました。すると、その中の一人が日本語で「兵隊さん、ご苦労様です」と声を掛けてきたのです。聞くと、横浜の人で、支那人と結婚して当地に住んでいるとのことでした。

その後、南寧に向かって進軍を開始し、昭和15年1月24日、南寧市に集結しました。南寧で、仏印から中国内陸に物資を運ぶ援蒋ルートを遮断することが目的だったのです。ある時、山頂から下山して、麓の山陰に宿営したことがありました。誰か先に寝ている人の間が暖かそうだったので、その間に横になりました。翌朝、目を覚ますと、なんと敵の死体の間に寝ていたのでした。

昭和15年9月、輸送船に乗り、北ベトナムのハイフォンに上陸しました。直ちに

ドーソン砲台を目指して進撃し、ハイフォンの背後の高地を占領しました。占領後、仏印軍との停戦交渉を成立させ、無血入城に成功しました。ハイフォンは椰子畑の中に外人住宅が立ち並び、どこか西洋の街にいるような雰囲気でした。街は整然としていて、住民も平常と変わらぬ生活を続けておりました。

仏印無血進駐により、援蒋ルート遮断の目的が達成されたため、部隊は南寧の南方の欽県港に上陸して連隊の指揮下に入りました。11 月 15 日、部隊に撤退命令が下されました。輸送船に乗り、苦しい戦いが続いて幾多の戦友が散っていった大陸を後にして、再度海南島に転進しました。

海南島では、瓊山市から定安市に通ずる交通の要衝である永興の町の警備に当たりました。永興の町の警備を解かれて瓊山市に駐留し、学校を宿舎として毎日訓練に明け暮れておりました。その際、慰安婦の護送を担当したことがありました。東海岸の部隊に送るのですが、朝鮮人の若い女性十人ぐらいと引率の男をトラックに乗せて山道を護衛して行ったのです。引率の男に聞いたところ、募集して来たのだそうですが、女性たちも覚悟して来たのか落ち着いた様子でした。

部隊では、一般の女性を強姦することは固く禁じておりました。しかし、古兵の中には、「女を徴発に行こう」と言って遊びに行く者もおりました。ただ、私は行ったことがないので、それが強姦を意味するのか、私娼と遊ぶと言う意味なのかは判りません。また、第一線では戦闘がありますから慰安所はなく、後方の部隊が駐屯しているようなところに開設されておりました。

昭和 16 年の 10 月、次期作戦準備のために、海南島の瓊山から台湾の高雄に転進することになりました。高雄市郊外の陸軍倉庫を兵舎として宿営しました。既に大東亜戦争の開戦は必至の情勢で、我が部隊はフィリピンに上陸することになっており、上陸後の進出目標も設定されていたのです。11 月下旬に高雄を出港し、澎湖島の海軍基地の馬公港で待機していましたが、12 月 8 日、船中で日本海軍がハワイの米軍基地を攻撃したとの報せを受けました。12 月 17 日、ついに馬公を出港してフィリピンに向かったのです。

マニラから 160 キロほど北方に位置する リンガエン 湾に上陸しました。早速自転車と自動車を乗り継いでマニラに向かいました。途中、敵と激しく交戦しながら 12 月 31 日マニラに入城しました。敵軍には米兵だけではなく、現地人も参戦しておりました。1 月 5 日、バターン半島を攻略するために、銀輪を連ねてマニラを出発しました。途中自転車を放置し、敵と激烈な銃撃戦を繰り広げながらバターン半島を占領し、敵をコレヒドール島に退却させたのです。我が軍は華々しい戦果を挙げたのですが、大隊長を始め、多くの戦友を失ってしまいました。

昭和 17 年 2 月 1 日、我が軍はジャワ攻略のために、リンガエン湾から輸送船の金城丸に乗船しました。第三艦隊に護衛され、数十隻の輸送船は、一路ジャワを目指し

て南進を始めました。熱帯の海を、途中マカッサル海峡のホロ島に一時立ち寄り、一ヶ月掛けてジャワ島の中部の北岸にあるクラガンに上陸しました。

攻略の目標は、東部の中心都市スラバヤでした。自動車部隊として、砂糖黍畑の中のアスファルト舗装の道路を進みました。途中、住民たちは親指を立てて我が軍を歓迎してくれました。ジャワの住民は、フィリピンの住民とは違い日本軍に対して友好的で、敵対することはありませんでした。私たちが斥候に行くと、住民はコーヒーを出して接待してくれるのです。3月10日、スラバヤが落城しましたが、我が部隊は入城せず、残敵掃蕩のためスラバヤ南方のマランに転進することになりました。

マランは、高原に位置するオランダ人の避暑地でした。我が部隊は市内にある学校に宿営し、治安の維持に乗り出しました。住民たちは非常に親日的で、友好を兼ねてジャワ語の勉強をしておりました。ただ一度、宿舎としていた学校にジャワ人の娼婦が入り込んできて、兵隊とトラブルになったことがありました。

4月になり、今度は上陸地点のクラガンの近くのレンバンで市内の巡察に当たることになりました。住民は平穏に暮らしており、私たち幹部は、時折郡役所に招かれてジャワの踊りを見学したりしておりました。毎日住民との交流に努め、ジャワ語を習ったり日本語を教えたりしていたのです。

8月中旬、私たちに内地帰還の命令が出ました。戦死した戦友たちを残し、生死を共にした戦友と別れを惜しみ、連隊本部のあるバタビア (＊ジャカルタ) に移動しました。連隊長より別れに際しての訓示を頂いて輸送船でシンガポールに向かい、三週間ほど待機して市内を見学しておりました。その際、市内のホテルに朝鮮服を着た若い女が50人ほど宿泊していたので、引率していた男に聞いたところ、「ビルマの前線に行くと儲かるので朝鮮から連れて来た」とのことでした。女たちは無理矢理連れて来られたようには見えませんでしたから、募集で来たのでしょう。

その後、サイゴンを経由して台湾の高雄港に着いたのは、9月の中旬でした。検疫を済ませて湖口の演習場に十日ほど隔離され、9月30日、台北第一連隊補充隊に戻りました。当時は、日本軍が優勢の時でしたので、国民も戦勝気分に湧き立っており、歓迎の日の丸の旗の波に迎えられて営門を潜りました。昭和17年10月3日に除隊し、花蓮港寿庄出身の戦友四名と寿駅頭で会社の歓迎式に列席し、私が代表として謝辞を述べ、四年半の私の軍隊生活に幕を下ろしたのでした。

花蓮港製糖会社に復職し、寿農場の第三農場長に就任しました。もう20代の半ばを過ぎていましたので、両親の勧めに従って、翌年の4月、熊本の中川裁縫女学校を出た8歳下の妻と熊本で華燭の典を挙げました。妻を連れて台湾に戻る途中、同じ船に乗り合わせた二十代とおぼしき五〜六人の内地人の女性たちと知り合いになりました。私たちが新婚だと判ると、妻に向かって「奥さんはいいですねえ、私たちは……」と言葉を濁して、涙顔になってしまいました。不審に思って、後で周りの人

に聞いたところ、何でも戦地の軍隊に行く慰安婦の人たちとのことでした。

妻にとっては、台湾は初めての外地でした。最初は、内地との違いに驚いていましたが、直ぐ慣れて台湾での生活を楽しむようになりました。製糖会社には社宅があって、八畳と六畳に台所と風呂、トイレが付いておりました。水道はなく、タンクから水を引いていました。ガスはありませんでしたが、薪は台湾人が割って用意してくれました。風呂は、台湾人が当番で水を汲んでくれました。ただ、洗濯や食事は台湾人の手を借りずに自分たちで切り盛りしておりました。

米は購買所で買っていましたが、水道代や燃料費は只でした。生活面では、熊本よりもずっと楽でした。ただ、社宅は事務所や購買所からは一キロほど離れていたので、購買所に買い物に行く時は、台湾人の押してくれる台車に乗って往復していました。アミ族の監督の三人と台湾人の労働者の班長も社宅に入っておりました。労働者たちも社宅でしたが、トタン葺で板の間の粗末な社宅に住んでいました。ただ、台湾人やアミ族の家には風呂が付いていませんでした。元々風呂に入る習慣がなく、水やお湯で水浴びをしていたのです。台湾人やアミ族の生活は、それほど豊かとは言えませんが、食べる物には不自由しておりませんでした。

アミ族の部下は、前述したように中村、村山、増田と日本名に改姓名した三人がおりました。三人は、台湾人の労働者の監督をしていました。アミ族は平地に住んで稲作をしており、首狩もせず大体において温和な人たちでした。私の隣家の増田さんは社宅に住んでいましたが、全く内地人と同じような生活をしていました。ただ、奥さんは着物ではなく、伝統的な民族衣装を着ていました。三人の子供がおりましたが、皆優秀で内地人の学校の小学校に入り、娘さんは内地人でも難しい花蓮港高等女学校に通っていました。弟も、花蓮港中学に合格しています。ただ、アミ族の人たちは、終戦後中村さんだけを残して農場を辞め、田舎に帰ってしまいました。

昭和 19 年の 9 月に、大型台風が襲来し、台湾人やアミ族の家が大分壊されました。それで、会社の倉庫を開放して被災者たちが入居できるようにしたことがありました。怪我人にはヨードチンキを塗って消毒してあげたのです。また、子供が生まれたばかりの台湾人の母親たちがいたので、私の家に引き取って世話をしました。その間、私たちは子供たちを抱いて押入れに寝ていました。私は、台湾人やアミ族と接する時は、常に思い遣りの心を持って接することをモットーにしていたのです。終戦後、その母親たちから「台風の時は、大変お世話になりました」と、食料の差し入れを受けました。

大東亜戦争の戦雲も急を告げ、寿製糖工場も空襲されるようになり、敵軍の本土上陸も囁かれるようになりました。昭和 19 年 10 月、私は花蓮港飛行大隊台湾特設工兵隊に再度召集されました。月給は 20 円ぐらいでしたが、他に会社から家の方に毎月 50 円ぐらい支給されておりました。今度は軍曹に任じられ、台湾人やアミ族の志

願兵の第二小隊長を命じられました。志願兵にも、一ヶ月20円ぐらい支給されていました。花蓮港飛行場は、特攻機の基地になっていたので、敵の攻撃から特攻機を守るため、特攻機を裏山に秘匿するのが任務でした。特攻機の出撃の際には、昼夜の別なく特攻機をトラックに載せて飛行場までの数キロの道を運んでおりました。特攻機の出撃を見送る時は、実に感無量でした。

平常は至極平穏で、普段は作業場の見回りをし、休養日には全員で魚獲りをしておりました。20年の8月、私はマラリヤに罹って陸軍病院に入院していました。9日、ソ連軍の参戦の報があって、即刻退院を命じられました。15日、国民学校の校長室で終戦の詔勅を拝聴しました。敗戦の報には残念でならず、人目を憚ることなく声を上げて泣いてしまいました。すると、志願兵たちが、「隊長、心配しないで下さい。日本は必ず復活しますから」と慰めてくれたのです。翌日、大隊長の命令により隊を解散し、私の二度目の御奉公も終りを告げました。解散する時、アミ族の志願兵にだけ小銃を渡して帰しました。アミ族は日本人に親近感を持っていて、もしもの時には台湾人よりは頼りになると思ったからです。

製糖会社には、都合四年半ほどおりましたが、台湾人やアミ族と喧嘩したことはありません。口で叱ることはありましたが、手を出したことはありません。当時、アミ族は日本人と先祖を同じくする人たちだと思っていましたが、台湾人は日本人とは違って支那人の子孫だと思っていました。一視同仁とは言っていましたが、台湾人を同胞だとは思っていませんでした。だからと言って、馬鹿にしたり軽蔑したりしたことは全くありませんでした。

花蓮港の街の中でも、内地人と台湾人が喧嘩するようなことはありませんでした。ただ、終戦後、台湾人の態度が大きくなったような感じは受けました。花蓮港でも、警察官が報復されたという噂を聞きました。国民党の軍隊が花蓮港にも来ましたが、それほど悪いことはしませんでした。

終戦により除隊し、製糖会社に復職して終戦業務に従事していましたが、台湾人が我々に危害を加えたり、仕返ししたりすることはありませんでした。出来るなら、ずっと台湾に住み続けたかったのですが、翌年の4月、台湾人の従業員たちの盛大な見送りを背にして、住み慣れた寿農場から引き揚げました。花蓮港から鹿児島港に上陸して熊本に帰り、日本での新しい生活を踏み出したのです。

⑲　南溟の果てに

高　天生（民族名；ヤオウィ・ノミン）（1921？年生）高砂義勇隊

私は、台湾先住民のタイヤル族の出身で、現在の苗栗県泰安郷で出生しました。両親は、山地に教育所が出来る前の世代ですから、全くの無学でした。

私も教育所には通わず、夜学会で日本語のアイウエオを習っただけです。私が六歳の頃、駐在所に「中馬」という内地人の警丁がおりました。私はこの人に可愛がられ、毎日のように駐在所に遊びに行っているうちに自然に日本語を覚えました。ですから、日本語は教育所や夜学会で習ったのではなく、内地人の警丁に教わったのです。当時は、高砂義勇隊に入隊するまで両親の仕事を手伝って、畑仕事や狩猟をしておりました。私は、猪狩の名人だったのです。

タイヤル族は、顔に刺青を入れる習慣があり、私も 15 歳の時に額と顎に刺青を入れました。女は額と両の頬に刺青を入れますが、濃いほど美人とされていました。入れないと、タイヤル族の男とは結婚できず、漢族の男と結婚しなければなりませんでした。

22 歳の時、私は第五回の高砂義勇隊に志願しました。警察に強要されたり勧誘されたりしたのではなく、自分の意思で志願したのです。当時は、自分のことを日本人と思っていましたし、また自分には日本精神があったので、日本の戦いに加勢しようと思い、自ら志願したのです。

両親には強く反対されましたが、それでも男ならば軍隊に入って日本のために戦うのは当然だと、押し切って志願したのです。私の兄弟は男四人で、私は次男でした。兄弟の中で、義勇隊に入ったのは私一人だけでした。私の部落からは、四人が出征しましたが、生還したのは私一人だけでした。

入隊する前に身体検査と体力検査がありましたが、筆記試験や口頭試問はありませんでした。無事合格して「平田時夫」と改姓名し、ニューギニアに派遣されることになりました。ただ、台湾では訓練せず、南洋のパラオで一ヶ月間軍事訓練を受けました。高砂族は、蕃刀を帯刀して銃を撃ったり、60 キロの荷物を担いで行進したりと、厳しい訓練を課されましたが、上官から叩かれるようなことは、ほとんどありませんでした。パラオで訓練を受けていた時は、食料が不足することはありませんでしたが、ニューギニアでは食料が足りず、ひもじい思いをしました。

ニューギニアに到着してからは、二年ぐらい台湾人の軍夫と一緒に道路建設に従事しておりました。全部で千人以上いたと思います。私は勤務態度が良かったので兵長に任命され、隊のまとめ役を任されました。時々、敵機の空襲があって、その度ごとに作業を中断して、防空壕に逃げ込んでおりました。初めの二年間は、食料がありましたが、三年目頃からは、空襲が激しくなり、食料が不足して海岸線を移動するようになりました。

戦争も末期になり、敵軍が上陸して白兵戦を演じたことがありました。ただ、向こうが機関銃なのに、こちらは三八式の歩兵銃でしたから、勝負は最初から明らかでした。戦友たちは、次々に敵弾に斃れ、ついには降参に追い込まれてしまったのです。私は、幸運にも怪我はしませんでしたが、虜囚の屈辱を味わわされることになってし

まいました。

五ヶ月ほど捕虜収容所にいましたが、食べ物はパンや缶詰だけで、腹一杯は食べられませんでした。それでも、捕虜になる前は握り飯一個が精々でしたから、それに比べればずっとましでした。足りない分は、椰子の実などを取って来て食べておりました。収容所では高砂族と内地人は一緒でしたが、台湾人や朝鮮人とは別でした。

高砂族と内地人は大変仲が良く、内地人の上官は、内地人や台湾人を叩いたりしていましたが、高砂族は叩きませんでした。台湾に戻る時も、高砂族と台湾人は別の船でした。ただ、高砂族と台湾人の仲も別に悪くはありませんでした。

終戦の翌年、台湾に戻って来て、初めて日本の敗戦を知りました。捕虜収容所にいた時は、負けたとは思っておらず、まだ戦闘が継続していると思っていたのです。もし何か手伝えるのなら、もう一度日本のためにお役に立とうと思っていましたから、敗戦の事実を知った時は、日本はなぜ負けたのかと悔しくてなりませんでした。

ニューギニアには四年ほどいたわけですが、その間の給料は現金で受け取らず、軍事郵便貯金に入っておりました。ニューギニアでは、現金をもらっても使い道がなかったのです。四年間で四千円ほどにもなりました。巡査の月給が40円の時代でしたから大金でしたが、もう国民党の世の中になっていたので下ろせず、結局只働きと同じでした。

後で、お前たちは中華民国の国民だと言われましたが、とても不快で惨めな気持ちになりました。当時は、自分のことを紛れもない日本男児だと思って日本精神で武装していましたから、支那人と一緒にされたのが堪らなく嫌だったのです。実際、大陸から来た支那人と付き合ってみると、狡猾で信用できず、全く自分とは合いませんでした。

台湾に戻ってからは、山地でずっと農業に従事してきました。今では卒寿を過ぎてしまい、息子にも先立たれてしまいました。ただ一つ心残りなのは、一度も靖国神社に参拝していないことです。靖国神社で、南海の島に散った戦友たちの霊を弔うことが出来たなら、もう思い残すことはないのですが、もう体の自由が利かなくなってきましたから、残念でなりません。

⑳　台北第一師範女子部に学んで

堀江美智子（1923年生）台北第一高女卒；台北第一師範女子部卒

私の両親は、広島の福山の田舎の出です。父は、福山の日彰館中学を出てから台湾に渡り、国語学校の師範部を出て、地方の学校で訓導を務めておりました。母は、三原の師範学校の女子部を出て、小学校に勤めておりました。その後、父と結婚して台湾に渡ったとのことです。

私は、幼稚園には通わずに、台北第一師範の付属小学校に入学しました。付属小学校には、一クラス 40 名前後の単式のクラスと一クラス二学年で 40 名前後の複式のクラスがありましたが、私は単式のクラスでした。先生方は皆優秀で優しかったのですが、時には厳しく指導していただきました。

付属小学校には制服があり、男の子は学生服、女の子はワンピースで、夏服は白、冬服は紺または黒でした。カバンは、低学年ではランドセルでしたが、高学年になると男の子は肩掛けカバン、女の子は手提げカバンが多くなりました。

同級生の中に、台湾人の男の子と女の子が一人ずつおりましたが、医者などの裕福な家庭の子弟でした。いずれも勉強がよく出来ましたので、苛めなどは全然ありませんでした。先生方も、一切差別せずに指導していたと思います。

付属小学校を卒業して、台北第一高女に入学しました。第一高女は、東・西・南・北の四クラスでした。一クラスに一人か二人台湾人の同級生がいましたが、皆裕福な家の娘で成績も良く、分け隔てなく付き合っておりました。先生方は皆内地人で、立派な先生方が多く、差別することなく公平に教えてくれました。

第一高女は規律を重んじ、放縦は許されませんでした。制服はセーラー服にスカートで、モンペはまだはいておりませんでした。カバンは手提げカバンで、時計は汽車通学などの許可を得た人だけが持っていました。すでに戦時色はありましたが、それほど緊張したものではなく、台北の街は平和そのものでした。

二百人の同級生のうち、七人が台北第一師範の女子部に入りました。東京の女子高等師範学校に進んだ者も二人おりました。台湾人の同級生は、裕福な家庭の娘でしたので、東京の女子大や専門学校に進んでいます。

台北師範の女子部の試験は、筆記試験、身体検査、体力検査、口頭試問、それとオルガンの試験もありました。台北師範の女子部は二年制で、一クラス 40 人でした。同級生に台湾人はいませんでしたが、上級生には一人おりました。これは、台湾人の学校である台北第三高女には一年制の補習科があったので、そちらを出てから先生になっていたためではないでしょうか。また、台北師範の女子部は全寮制でしたから、そこで日本式の生活を強要されるのは台湾人にとって苦痛だったので、敬遠されたのかもしれません。

女子部は男子部と同じ敷地内にありましたが、校舎は別で、話をすることさえ許されておりませんでした。女子部の寮は、二十畳ぐらいの部屋が五つあり、一部屋に 15〜6 人が入っていました。勉強部屋は別で、机と椅子がありました。時間に厳しく、9 時半の就寝時間になると、もう勉強はできず、布団を敷いて夜の挨拶をしてから床に入っておりました。皆勉強で忙しく、苛めなどしている暇もありませんでした。
食事は当番の人がいて、食堂で食事の準備を手伝っておりました。食事は十分で、おかずも肉や野菜、魚などがふんだんに付いていました。風呂も毎日入れましたが、洗

濯は自分でしておりました。授業料は官費で賄われていましたが、寮費は自分で払っていました。

女子部は、公学師範部だけでしたが、公学校と小学校の両方の免状を授与されました。授業は公学校の科目の他にも教育学、教育心理学、教授法などの専門科目も学びました。教育実習は、二年の二学期に主に付属の公学校で二ヵ月半行いました。小学校では二日間だけでした。一年から五年までの生徒が対象でしたが、七〜八人のグループで行なって、実際に教壇に立って教えたのは三〜四時間でした。

女子部を卒業して、台北と基隆の中間にある汐止公学校に赴任し、五年の女子組を二年続けて担当しました。台湾人の先生方もおりましたが、別にトラブルなく付き合っていました。本給は41円でしたが、全額母に渡しておりました。

汐止公学校には一応制服があって、男の子は学生服で、女の子はワンピースでした。裕福な家の子の中には靴を履いてくる子もおりましたが、台湾下駄や草履の子も多く、中には裸足の子もいました。カバンは、低学年の場合、ズックの手提げやランドセルでしたが、高学年の場合、男の子はズックの肩掛けカバン、女の子は手提げカバンが多かったように思いますが、中には風呂敷の子もおりました。

汐止公学校では、教え子たちが台湾人であるということはあまり意識しませんでした。ただ、歴史や地理、また国語は発音の訂正をする必要があったので、そのような場合は意識して教えていました。汐止公学校では、女学校に進学するのは五十人のうち、二人くらいでした。

汐止公学校には二年勤めて、台北市役所の隣の内地人の学校である樺山国民学校に転勤しました。制服はありましたが、戦争も末期になっていて物資不足のため、制服を着て来れない子たちもいました。

私は、師範学校を卒業した際に作った紺のスーツを着て教壇に立っていましたが、二〜三年経つと、裏返しに仕立て直して着ておりました。樺山国民学校では三年、四年、五年と女子組を担当して終戦になってしまいました。

終戦の報せを聞いた時は、負けるとは思っていなかったので意外でしたが、終戦後に台湾人に苛められることはありませんでした。当時、両親は病気で、新竹の田舎に疎開しておりました。引き揚げは、終戦の翌年の三月の末でした。師範学校の時、三週間の内地旅行に参加していましたので、二度目の祖国でした。両親の故郷の広島に落ち着いて、台北の近代的な生活から山の中の田舎町で、小学校の教員を続けることになったのです。

㉑　内地の台湾人

張　文芳（1929 年生）奈良県天理中学卒

私の祖父は、高雄州の東港の有名な漢方医でした。当時の富裕な家としては珍しく、妻は一人だけでした。父は三男で、公学校を卒業した後、名古屋商業を出て東京の精養軒でアルバイトをしていたそうです。また、嘘か本当か知りませんが、一時島崎藤村の書生をしていたとのことです。母は桃園の出身で、公学校を卒業して内地人の菓子屋の斡旋で上京し、東京の手芸学校に入っております。母は 17 歳の時、関東大震災に遭ったそうです。その際、朝鮮人がたくさん殺されたと語っておりました。

両親は内台航路の船上で知り合ったらしく、私は、この両親の長男として桃園に生を享けました。両親は、家でも日本語で話しておりましたから、日本語は自然に覚えました。逆に、台湾語はほとんど出来ませんから、終戦後に苦労することになりました。生活様式もまったく内地人と同様で、名前も「文ちゃん」と日本式に呼ばれ、完全に内地人として育てられたのです。両親は、台湾が日本の一部として、いつまでも続くと思っていたのでしょう。

支那事変の前々年の 1935 年に、父の仕事の関係で大阪に引越しして、豊中の小学校に入学しました。両親は、内地の事情に精通していましたから、隣近所の人たちとトラブルを起こすことなく、また差別されることなく仲良く過ごしておりました。

父は、広東省の汕頭でも貿易の仕事をしていましたが、支那事変が起こると、一家で台湾の桃園に引き揚げました。内地では情報が統制されていましたが、汕頭では様々な情報に接することが出来たからです。

台湾では、桃園の内地人の通う小学校に入りなおしました。台湾語が出来なかったので、台湾人の通う公学校には入れなかったのです。台湾人は、クラスに私を含めて二人しかおりませんでした。小学校の国語の教科書は、カラーに変わっていて、満開の桜の挿絵が実に綺麗で華やかであったことを覚えております。

その後、五年の時に、また元の大阪の豊中の小学校に転校することになりました。私は、戦地の兵隊への慰問として、「戦地の兵隊さん、ご苦労様です。帰ってくる時は、蒋介石の首をお土産に持って来てください」という手紙を書いたことがあります。先生に、そのような手紙を書けと教唆されていたのです。家で、その手紙を書いていると、それを見た母が、「私たちは支那から来たのだから、こんなことを書いてはいけません」と諭してくれました。

私の母は、大阪に住んでいた時、既に支那事変が始まっていましたが、わざわざチャイナドレスを着て、梅田の阪急などに買い物に出掛けていたのです。そういう意味では、民族意識の強い人だったのでしょう。ただ、日本に反感を持っていた訳ではありませんでした。母がチャイナドレスを着て街を歩くと、通り過ぎる内地人たちは、

「支那人だ」と囁くのです。私は、支那人と思われるのが嫌で、母と並ばずに、二、三メートル後ろから付いて行きました。母は、周りの視線を全く意に介さず、堂々と店に入って買い物をしておりました。母は、家では隣近所との付き合いも良く、別に揉め事を起こす訳でもなく、仲良くやっていたのです。私も隣近所の子供と喧嘩をすることはありましたが、別に民族の違いから喧嘩していたわけではありませんでした。私は、当時子供でしたから、明確な民族意識があった訳でもなく、自分の名前が「張」という支那人の名前であることに引け目を感じていて、なぜ内地人に生まれなかったのかと恨めしく思っておりました。ただ、私も1942年に、「豊島文男」と改姓名しています。当時の小学校では、「大和民族は、世界最優秀の民族だが、支那人は劣等民族だ」などと教えておりましたから、大和民族ではない、支那人を先祖に持つ私は、内地人の級友たちに対して引け目を感じていたのです。

1942年に小学校を卒業して、天理中学に進学しました。私のクラスでは、私一人だけが台湾人でしたが、苛められることもなく、成績は常にトップクラスでした。改姓名前は、級友たちに「張」と呼ばれていましたが、改姓名後は「豊島」と呼ばれるようになりました。クラスには、三、四人の朝鮮人の同級生がおりましたが、朴とか尹とか名乗っていて、朝鮮名のままでした。

先生は、台湾人の私は差別しませんでしたが、朝鮮人の級友たちに対しては快く思っていなかったようでした。それは、朝鮮人の級友たちの身なりが汚らしかったからです。学校の綴り方で一等になった作文があって、雑誌に掲載されたのですが、その一節に、「朝鮮人の級友に誘われて、級友の家に行きましたが、そのお母さんが馬の小便みたいなお茶 (＊麦茶) を出してくれました」というのがありました。朝鮮人に対する蔑視感丸出しの作文を掲載したということですが、当時の内地人の朝鮮人観が良く現れていると思います。

三年の夏に、横浜の海軍の勤労動員先で敗戦の報に接しました。「これは大変なことになったな」と思っただけで、台湾がどうなるかについては、何も考えられませんでした。

翌年、台湾に戻ったのですが、連絡船が鹿児島沖で座礁したので、軍艦に乗り換えて基隆に帰って来ました。基隆港に入ると、桟橋を中国兵が歩いておりました。それが、背中に唐傘を負い、天秤棒を肩に掛け、籠には鍋・釜を入れていましたので、「これが戦勝国の軍隊か」と仰天してしまいました。入港前は、台湾に来た中国兵に関する噂は全く聞いていませんでしたし、また日本軍の凛々しい姿しか知らなかったからです。

私は、子供の頃、「鉄砲かついだ兵隊さん　足並みそろえてあるいてる　トットコトットコ　あるいてる　兵隊さんはきれいだな　兵隊さんは大好きだ」という歌があって、よく歌っていたものでした。ですから、一層中国の兵隊がみすぼらしく見えたの

でしょう。また、社会がこのような歌を歌うのに何の抵抗もない雰囲気でしたから、志願兵でも、実際には、当時の社会の雰囲気に押され、見えない力に強制されて志願していたのです。

終戦当時、息子からの「徹底抗戦する」という手紙を読んだある内地人の母親は、「東條のバカヤロー」と叫んでおりました。親たちは、人前では「御国のために命を捧げなさい」と言っておりましたが、蔭では泣いていたのです。教育が誤った方向に行くと、いかに大きな災禍をもたらすかということの良い見本と言えるでしょう。現代の日本人は、戦時とは逆の洗脳教育を受け、ただ戦争を憎んで平和を叫ぶだけで、真の平和とはどういうものなのか解らなくなっているのではないでしょうか。

〈続〉